

船橋市議会会議長賞

税がつなぐ未来への架け橋

船橋市立前原中学校

第三学年

西林 心奈

私たちの生活は、当たり前のようにある道路や学校、病院に囲まれている。朝、登校する道も、雨の日に滑らないよう舗装され、信号機が安全を守っている。教室では新しい教科書を広げ、安心して授業を受けている。だが、これは誰かの「善意」や「偶然」で成り立っているわけではない。その土台には「税」がある。

税と聞くと、大人が働いたお金から引かれるもの、あるいは買い物をしたときに支払う消費税を思い浮かべる。中学生の私には、まだ直接支払う機会は少ない。しかし、税は私たちの生活のすみずみにまで行き渡り、知らぬ間に私もその恩恵を受けているのである。

例えば、私の兄がけがをして病院へ行ったときにかかった治療費は思っていたよりも安く、すぐに完治に至った。これも医療保険制度や救急体制が税によって支えられているか

らだ。もし税のしくみがなければ、医療費は今の何倍になり、必要なときに治療を受けられない人も出てくるだろう。

さらに、税は災害時にも力を発揮する。昨年一月、能登半島地震が起こり、多くの家が倒壊し道路も寸断された。ニュースで見た避難所の映像には、毛布や食料が整い、消防や自衛隊員が被災者を支えていた。これらの活動にも税金が使われている。税は私たちの安全と安心を守る「見えない盾」だと感じた。

だが、税はただ支払えば良いものではない。限られた資源だからこそ、無駄なく公平に使われるべきだ。私たちは将来、税を納める立場になる者として、その使い道に関心を持つ責任がある。ニュースや議会の情報を知り、自分の考えを持つことがその第一歩である。

私は地方税について調べ、道路や公園、図書館、地元イベントなどが税で成り立ってい

ると知った。私が運動するときを使う公園や新たな知識を得るために通う図書館も税の恩恵だ。税は「毎日」を支える身近な存在であり、「未来」を築く投資でもあると感じる。

これからの日本が高齢化や人口減少という課題に直面する。税収が減る中、社会保障や教育をどう守るかが問われている。私もやがて働き、税を納める立場になる。そのとき、義務としてでなく「未来を支える一員」として誇りを持ちたい。そして、使われ方を見守り、より良い社会づくりに声を上げる人になりたい。

税は過去から未来へ社会をつなぐ架け橋だ。今、安全で充実した日々を送れるのは前の世代が納めた税と、その使い道考えた人々のおかげである。次は私たちの番だ。税を通じて未来を支える責任を胸に、社会の一員として歩んでいきたい。